ウェルカム・サンデー説教（2023 年２月 19 日）

説教者：中村信哉

受け、見出し、開かれる

マタイの福音書７章 7-11 節

はじめに

今日の聖書箇所は、イエス様が山の上で弟子たちや群衆に向けて語った説教、「山上の説教」の中の一部です。イエス様はここで、特に「求めること」の大切さを教えておられます。ここで使われている「求める」という言葉は、ギリシヤ語の「アイテオー」という言葉ですが、「願う」「要求する」「頼む」という意味の言葉です。つまり誰かに「求めること」が前提となっているのです。７節でも、**「求めなさい。そうすれば与えられます」**とあって、求めれば、誰かから与えられると言われています。イエス様はここで、誰に「求めること」を想定しているのでしょうか。それは、11 節にあるように**「天におられるあなたがたの父」**です。つまり聖書の中で「主」と呼ばれる唯一の神様のことです。

イエス様は今日の聖書箇所で、聖書の中で「主」と呼ばれる唯一の神様に、「求めること」の大切さを教えておられるのです。神様に求めること、神様に願い、要求し、頼むこと、それは一般的に「祈り」と呼ばれます。その意味でイエス様は、祈ることの大切さを教えておられるとも言えます。

「祈る」という行為は、クリスチャンだけがするものではありません。多くの日本人も祈ります。初詣やあらゆる時に、神社に出かけて賽銭を投げ入れ、その神社で祀られている神に祈ります。日本人には宗教心がないわけではありません。人間を越えた神という存在がいて、自分たちの人生を見守っていると漠然と考えているのです。しかし日本人は、唯一の神がいるとは考えません。八百万の神、つまりあらゆる神々が存在すると考えているのです。神は一人じゃなくて良い、たくさんいて良いと考えるのが多くの日本人の考え方です。

しかしイエス様は、どの神々に祈ってもよいと教えているのではなくて、「天におられるあなたがたの父」である方、聖書の中で「主」と呼ばれる唯一の神様に祈るようにと教えているのです。

1. 求めなさい、探しなさい、たたきなさい

7-8 節を見てみましょう。**「求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれでも、求める者は受け、探す者は見出し、たたく者には開かれます」**。イエス様は、「求めなさい」と言うだけなく、「探しなさい」「たたきなさい」とも言われます。「求める」というのは、お願いすること、要求することですから、おもに「口」で行なうことです。しかし「探す」というのは、「口」だけでなく、歩き回ったりしなければなりません。その意味で「探す」には「足」も必要です。また「たたく」と

いうのは、戸を叩く、ノックするという意味の「たたく」ですから、「手」が必要です。

今日の聖書箇所の中心は、「求めること」です。9-11 節を見ても、「求めること」が中心であることがよく分かります。しかしイエス様は、「求めなさい」と言うだけでなく、「探しなさい」「たたきなさい」とも言われます。これは、どのように「求めるべきか」を教えているのかもしれません。

口だけでなく、足も使って、手も使って祈りなさいと教えているのかもしれません。例えば、受験を控えている学生が、合格のために祈ったとします。しかし口だけで祈って、勉強をしないのでは合格は見込めません。本気で祈るなら、口だけでなく、足も手も使わなければなりません。足を使って塾や予備校に通うことも必要でしょう。手を使ってペンを握り、毎日勉強することも必要でしょう。祈りは全身全霊をもって行うものです。何もしないで、神様の奇跡を待つのではなく、やれることはすべてやって、後は祈って神様の御心に委ねるというのが、「求めなさい」「探しなさい」「たたきなさい」という意味なのかもしれません。

また「求めなさい」「探しなさい」「たたきなさい」という三重の表現は、とにかく「しつこく」「求めなさい」という意味、あるいは「求め続けなさい」という意味なのかもしれません。いずれにしてもイエス様は、求めれば与えられる、探せば見出す、たたけば開かれると、聖書の中で「主」と呼ばれる唯一の神様に祈れば、空しく返ってくることはない、必ずその祈りは報われると教えているのです。「求める」にしても「探す」にしても「たたく」にしても、いずれも行動することです。何もしないで、ただ待つだけの人生ではなく、求めてみなさい、探してみなさい、たたいてみなさいとイエス様は言われるのです。聖書の中で「主」と呼ばれる唯一の神様の前に、行動してみなさい、そうすれば何かが返ってくる、何かを受け、何かを見出し、何かが開かれていくのだと言われるのです。

2. <u>天におられるあなたがたの父に</u>

しかし私たちが見落としてはならないことは、聖書の中で「主」と呼ばれる唯一の神様は、「天におられるあなたがたの父」と呼ばれていることです。天におられる神様は、残念ながらすべての人の「父」であるわけではありません。ヨハネ１：12 には、こういう言葉があります。**「この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった」**。神様は、すべての人の「父」であるわけではありません。神様は、「この方」すなわちイエス様を受け入れた人の「父」となってくださり、イエス様を信じた人の「父」なのです。イエス様を受け入れ、信じた人だけが、神様の子どもとされ、神様を「父」と親しく呼び、神様の愛と守りの中で生きていくことができるのです。そして、祈りが聞かれ、求めれば与えられ、探せば見出し、たたけば開かれるという特権に与ることができるのです。

キリスト教の祈りには、定式があります。祈りの最初に、「天におられる私たちの父なる神様」と呼びかけ、祈りの最後に、「イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン」と言って、祈りを閉じます。聖書によれば、私たち人間は生まれながらに罪の性質を持っています。人類最初の人であるアダムとエバが神様に背いて、禁断の木の実を食べた時から、

すべての人間が罪の性質を持って生まれてくることになりました。その結果、神様との関係は壊れてしまったのです。私たちは、生まれながらの性質のままでは、神様に祈りを聞いてもらえない存在なのです。私たちは、新しく生まれなければ、神様の子どもとして新しく生まれなければ、神様に祈りを聞いてもらえないのです。

私たちの祈りを神様に聞いてもらうためには、また私たちが神様の子どもとなるためには、私たちの罪の問題を解決しなければなりません。イザヤ書 59：1-2 には、こういう言葉があります。**「見よ。主の手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて聞こえないのではない。むしろ、あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ」**。私たちの祈りを神様に聞いてもらうためには、私たちの罪の問題を解決しなければなりません。しかし私たちは、自分の罪を自分で解決することはできません。罪の本質は自己中心ですが、私たちの罪の性質は、思いと言葉と行いのすべてにベッタリとこびり付いているからです。イエス様は、私たちの罪の問題を解決するために、十字架で死んでくださいました。私たちと神様を和解させるために、十字架で死なれました。イエス様は十字架で、私たちの罪の罰を代わりに受けてくださったのです。イエス様の十字架の死は、私たちのための身代わりの死です。そうしてイエス様は、私たちの罪に対する神様の怒りを宥めようとされたのです。私たちがもし、イエス様を私たちの救い主と受け入れ、信じるなら、私たちと神様との間にある罪の問題は解決され、神様と和解し、神様の子どもとされるのです。

イエス様は、「求めなさい」「探しなさい」「たたきなさい」と言われます。私たちがまず求めなければならないのは、またまず探し、たたかなければならないのは、イエス様ではないでしょうか。私たちはまずイエス様を求めなければなりません。まずイエス様を探さなければなりません。まずイエス様を、そして天国の扉をたたかなければなりません。そうでなければ、私たちの祈りは空しいのです。イエス様を信じて、神様の子どもとされ、天の父なる神様に祈るのでなければ、どんな祈りも神様には届かないのです。イエス様の名において、天の父なる神様に祈るものでなければ、与えられることも、見出すことも、開かれることもないのです。

3. <u>良いものを与えてくださる</u>

では、イエス様の名において、天の父なる神様に祈れば、どんな祈りも叶えられるのでしょうか。9-11 節を見てみましょう。**「あなたがたのうちのだれが、自分の子がパンを求めているのに石を与えるでしょうか。魚を求めているのに、蛇を与えるでしょうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っているのです。それならなおのこと、天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか」**。ここでイエス様は、どんなに悪い父親でも、自分の子どもは可愛がるものだ、だからどんなに悪い父親でも、自分の子どもには決して「悪いもの」を与えず、「良いもの」を与えるはずだ。そうであるならば、私たちの良い父親となってくださった天の神

様は、私たちに決して「悪いもの」を与えるはずはない、必ず「良いもの」を与えてくださるはずだと教えています。

しかしここで注意しなければならないのは、神様は、御自身の子どもである私たちに「悪いもの」は与えないけれど、必ずしも「願ったもの」を与えてくれるとは言われていないことです。神様は私たちに「良いもの」を与えてくださると言われているだけです。神様は決して、レストランの注文のように、注文した物を必ず与えてくださるわけではないのです。神様は、私たちが「求めたもの」をそのまま与えてくださるのではなく、私たちにとって「良いもの」を与えてくださるのです。神様は、私たちの召使いのような方ではありません。神様は、しっかりと意志を持った方であり、私たちにとって最善のものは何かをご存じの方です。過去・現在・未来を見通して、全世界を治めておられる全知全能の神様です。その神様が、私たちが「求めた」ならば、私たちにとって最善の「良いもの」を与えてくださると言うのです。

私たちは、自分にとって何が一番良いことかを見極めることができません。「求めている」時は、その「求めていること」こそが、自分にとって一番良いことだと信じて疑いませんが、後になって振り返ってみると、必ずしもそうではなかったということは良くあることです。子どもたちは、目の前にある魅力的な物を欲しがります。しかし私たち大人は、子供たちよりも広い視野をもって、子どもたちにとってそれが本当に必要であるかを見分けます。同じように神様も、広い視野をもって、全知全能の視点に立って、私たちに何が「良いもの」であるかを見極めておられるのではないでしょうか。もし私たちが、「求めること」がすべて叶えられるとしたら、逆にそれは非常に怖いことではないでしょうか。私たちにとって最善の「良いもの」だけを与えてくださる方だからこそ、安心して求めることができるのではないでしょうか。

イエス様の使徒であったパウロも、祈りが叶えられなかった経験を持った人でした。彼は、「肉体に一つのとげ」があったようです。体の障がいや病気であったのでしょう。彼は、それが癒されるように三度も祈りました。つまり「求め」「探し」「たたいた」のです。しかし彼の祈りは叶えられませんでした。イエス様から返ってきた祈りの答えは、こういうものでした。**「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」（IIコリント 12:9）**。パウロは、弱さが取り除かれるように祈りました。しかしイエス様は、「弱さはわたしの力が現れる大切なものである。わたしの力は弱さを通して現れる」と言われたのです。その結果パウロは、弱さを誇り、弱さを喜ぶようになったのです。そして**「私が弱いときにこそ、私は強い」（IIコリント 12:10）**とまで言うようになったのです。パウロは、自分が求めたことは与えられませんでした。しかし、「良いもの」は与えられたのです。それは、弱さと共に生きていく人生であり、弱さを受け入れ、弱さを喜び、弱さを誇りとして生きていく人生です。

<u>おわりに</u>

私たちは、自分にとって何が「良いもの」かを見極めることができません。しかしイエス様はそれでも、「求めなさい」「探しなさい」「たたきなさい」と言われます。私たちがもし、イエス様を信じ受け入れて、天におられる私たちの父である神様に祈るなら、神様は私たちにとって最善の「良いもの」を与えてくださるのです。私たちの祈りは、決して空しく返って来ることはありません。必ず「良いもの」として返って来るのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは、イエス様を信じ受け入れる者をご自身の子どもとして受け入れ、愛と守りのうちに育み、その祈りに耳を傾けてくださいます。どうかここにいるすべての人が、世界の造り主であり、全知全能の唯一の神様に、祈ることができますように。あなたは、私たちに悪いものは決して与えません。必ず「良いもの」を、私たちにとって最善のものを与えてくださいます。どうかあなたに信頼して、大胆に「求め」「探し」「たたく」ことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。